

タイトル

「私の王国」

あらすじ

「いつか私も王国で、幸せに暮らすのだ」。
椿（60）は生まれて初めて乗る新幹線の座席で涙する。旅行鞆の中には亡くなった夫の写真と高額老人施設の入会書。涙が伝う頬が次第に笑いで震える。声を出して笑いたいが未だ駄目だ。ここは人目がある。幸せに浸るのは王国に着いてからで良い。

子供の頃から家事を全て担い、厳格な父、重雄と気分やの母、鞠子の機嫌をとってきた。だが両親は、そんな椿より妹の桜子を溺愛。だからあの母の事故はほんの少しの仕返しだ。政信は優しく大人しい夫だ。怒ったことも声を荒げたこともない。父と正反対のこの夫となら幸せになれると思った。椿が姑の加代から嫌がらせをされても、そこにまるで何も無いかの様に政信の表情は変わらない。誰が笑っていても泣いていても。そこにあるのは見慣れた笑顔を張付けた能面の男。

娘の優香が私に笑顔を見せなくなったのはいつからだろう？ たった一人の娘。味方のハズだった存在がいつしか私を敵視している。政信が急死し葬儀を終えてホッとしたのも束の間、優香が遺産相続放棄を条件に椿と縁を切りたいと言い出す。数十年ぶりに椿と目を合せて話す優香の口からは、訳の分からない言葉が溢れ出す。虐待・暴力、椿のせいの子を産むことを諦めた……何を言っているのか。私が娘を虐待？ 私はただ必至で生きてきただけ。誰も分かってくれない。被害者は間違いないこの私だ！ 怒りがこみ上げる椿。度々酷い頭痛と悪夢に悩むようになる椿。夢の中で椿は、誰かを思い切り叩いている。力いっぱい叩いても叩いても、沸起る怒りは治まらない。床に蹲って泣いているのは幼い優香？ それとも姑？ 誰でも良い。どうせ夢の中のこと。少しでも重苦しい心を晴らし、足取りを軽くして、私は王国へ行くのだ。

登場人物表

椿	(10)	(32)	(35)	(57)	(60)	……主婦
篠田重雄	(35)	(57)	(60)	……椿の父		
篠田鞠子	(33)	……椿の母				
篠田桜子	(4)	(55)	……椿の妹			
篠田桔梗	(30)	(45)	(80)	……重雄の妹		
池端政信	(37)	(40)	(62)	……椿の夫		
池端加代	(57)	(60)	(82)	……政信の母		
池端優香	(3)	(25)	(28)	……椿の娘		
永瀬昌人	(30)	(33)	……優香の恋人			
早川	(42)	……桜子の恋人				
雪子	(45)	……重雄の愛人				
佐竹光子	(65)	……施設の入居者				
向井幸子	(64)	……施設の入居者				
佐藤由香	(28)	……介護士				
老人施設のスタッフ						
新幹線の車掌						

○上りの新幹線

田舎の田園風景の中を走る新幹線。

○同・車中

一人、座席に座っている池端椿(60)。

地味な身なり。化粧っ気も無い。

車窓を眺める憂いを帯びた横顔。

不意に涙がこみ上げ椿の頬が震える。

口元からは堪えきれず笑いが零れる。

慌てて口元をハンカチで押さえる。

通り掛った車掌が心配して声をかける。

車掌「大丈夫ですか？ どこか体調でも」

椿「いえ。先月亡くなった夫のことを思い出してしまつて。すみません」

傍らの古い男性物の旅行鞆を撫でる椿。

車掌「それは……何と言つていいか。ご愁傷さまです」

椿「……(頭を下げる)」

車掌「何かお手伝いできることがあったら、

何でも言つてください」

椿「ご親切に。ありがとうございます」

潤んだ目で車掌を見つめ微笑む椿。

車掌、満足そうに立ち去る。

微笑みをサッと消す椿。

再び視線を車窓に移す。

窓の外は徐々に都市に向かっている。

椿の声「嗚呼。声を出して思い切り笑いたい。

でも未だ駄目だ。人目がある内は。幸せに

浸るのは王国に着いてから……」

椿の口元に笑みが浮かぶ。

○タイトル「私の王国」

○深い森の中

緑深い森の中。

少女の歌声が聞こえる。

椿(10)と妹の桜子(4)が手を繋ぎ、

歌を歌いながらやってくる。

草の上にシートを敷き桜子を座らせる。

椿「ハイ。ママのお弁当。残さないでね」

桜子「うん」

椿「あと、スケッチブック」

ピクニック用の可愛いランチボックス
とスケッチブックを手渡す椿。

椿「夕方迎えに来るから。お母さんのことは
心配いらないからね」

桜子「うん」

桜子の頭を撫で、ニッコリ微笑む椿。

○篠田家・外観

田舎にある民家。

庭の片隅に植えてある椿の木。

枝に芽が出ている。

椿の声「庭の隅にある椿は、私が産まれた時、
死んだお祖母ちゃんが植えたらしい。椿の
様に、美しい女性になるようにと」

○同・両親の寝室

篠田鞠子（33）が寝込んでいる。

椿が昼食を運んでくる。

椿「お母さん。お昼持ってきたよ」

「……」返事は無い。

椿「今日も具合、悪い？」

鞠子「悪いから寝てるんでしょ」

椿「……ごめんなさい」

鞠子「桜子は」

椿「さつき森に連れて行った」

鞠子「私を買ってあげたランチボックスは」

椿「渡したよ。お昼のお弁当作って」

鞠子「ちゃんと『ママのお弁当』って言った？」

椿「うん」

鞠子「中身は」

椿「チーズのオムレツ食べたいうって言うから
入れてあげた。あとはサンドイッチ」

鞠子「そう。まあ、いいわ」

椿「……」

鞠子「あの人、桔梗さんは」

椿「分かんない。また本読んでるのかな？」

大人なのに家の事、何にもできないんだよ」

鞠子「（興味持ち） そうなの？」

椿「ご飯炊けないし畳も斜めに掃いちゃうし」
鞠子「嫌だ。アハハ。それで偉そうに本ばかり読んでるなんて、生意気ね」

母の笑顔に嬉しくなり、話し続ける椿。
椿「あとね、洗濯も何でも全部一緒に洗っちゃうの。白いのも色付きも。変だよ」

鞠子「やっぱり出戻りよね。人並みの事できたら離婚なんてしないものね」

椿「え。叔母さんって、離婚したの？」

鞠子「離婚、さ・れ・た・の」

椿「……」

鞠子「チョツと顔が良いからって、チャホヤされてイイ気になってるからよ」

吐き捨て、楽しそうに笑う鞠子。

母に合わせて笑って見せる椿。

鞠子「そっくりね」

椿「えっ？」

椿の顔をまじまじと覗き込み、

鞠子「アナタの顔よく似てる。桔梗さんと死んだ、ここのお祖母ちゃんに」

椿「……」

鞠子「イイ気になっちゃダメよ。人様の役に立てる様に、嫌われない様に、必死で頑張らなさいね」

椿「……はい」

鞠子「お母さんに感謝してね。私のおかげでお前は人並みに家の事できる様になれたんだから」

椿「はい」

鞠子「(食事を食べ)今日は煮物じゃなくて、もっとサツパリしたのが食べたかったわ」

椿「でも、昨夜はコレが食べたいって」

鞠子「言われた通りやれば良い訳じゃないの。先回りして察しなさいよ。本当、ダメね」

椿「ごめんなさい」

鞠子「もう要らない。下げて」

食事の盆を押し返す鞠子。

背を向け布団を被り、ふて寝する。

鞠子「あーあ。病気で食べる事しか楽しみが無いのに。切なくて涙が出てくるわ」

椿「……ごめんなさい」

食事の盆を持ち、静かに部屋を出る椿。

○同・ダイニング

食べ残しの盆を持った椿が入ってくる。

椿「ダメ！」

篠田桔梗（30）が料理を鍋ごと抱えて

食べながら本を読んでいる。

鍋を奪う椿。

椿「これはお母さんの！勝手に食べないで」

桔梗「ごめん。美味しそうだったから、つい」

椿「自分で作ればいいじゃないですか」

桔梗「椿は料理上手なのね」

椿「別に上手じゃないです。普通です」

桔梗「それで普通か。レベル高いなあ」

椿「（軽蔑）」

桔梗「お料理も出来て掃除でも何でも出来て。

凄いね」

椿「別に凄くないです」

桔梗「私、全部苦手」

椿「みたいですわね」

桔梗「楽しい？」

椿「えっ？」

桔梗「椿は毎日、ちゃんと楽しい」

椿「……」

桔梗「自分のこと、分からない？」

椿「……あつ。でも」

桔梗「うん」

椿「誰かが喜んでくれたり、褒めて貰ったら

嬉しい、かな」

桔梗「嬉しい。嬉しいか。うーん。嬉しいは

……難しいね」

椿「難しい？」

桔梗「『楽しい』は椿の幸せ。『嬉しい』は、

椿の幸せの時もあるし、そうじゃない時も

あるからね」

椿「叔母さんは楽しいの？」

桔梗「楽しいよ」

椿「毎日、本読んでばかりで何が楽しいの」

桔梗「本を読むのも楽しいし、夢があるから」

椿「夢？」

桔梗「本の読み聞かせをしてあげたいんだ。淋しい子や病気で寝たきりの人に。おいで」

椿、おずおずと桔梗に近づく。

山積みの本をテーブルに並べる桔梗。

桔梗「椿は、どんな本が好き？」

椿「本なんて読まない」

桔梗「嫌いななの？」

椿「生意気で偉そうだから」

桔梗「本を読むのが生意気？ どうして椿はそんな風に思ったの」

椿「どうしてって……」

桔梗「本は楽しいよ。誰でも受入れてくれるし、どんな世界にも行けちゃう。」

椿「……どんな世界にも」

桔梗「椿はどんな世界が良い？ 例えば将来の夢でもいいし、想像の夢物語でもいいし」

椿「……叔母さんって、ホント呑気だね」

桔梗「呑気？ そうかな」

椿「呑気だよ。本ばっか読んでで家のことは何も出来ないくせに、ご飯も炊けないくせに。どうして平気でいられるの」

桔梗「平気……でいたらダメなの」

椿「ダメだよ！ だから旦那さんから要らないって言われたんでしょ」

桔梗「！」

椿「離婚されて、どうしてそんな普通の顔してられるの。恥ずかしいよね。私だったら恥ずかしくて惨めで、死んだ方がマシ」

桔梗「椿。離婚は恥ずかしいことじゃないよ。もし恥ずかしくても惨めでも、死んだ方がマシな事なんて無いと私は思うよ」

椿「私は叔母さんとは違う。絶対違うから！」
言い捨て、立去る椿。

○同・外観（夜）

椿・桜子の声「お帰りなさいーい！」

○同・居間（夜）

篠田重雄（35）が仕事から帰ってくる。

出迎える椿と桜子。

飛びつく桜子を抱き上げる重雄。

重雄「ただいま。桜。今日も森へ行ってたの？」

桜子「うん！」

重雄「どんな絵描いたの？」

桜子「うーん。たくさん」

重雄「そうか。後でパパにも見せて」

桜子「うん！」

桜子の頭を撫でる重雄。

桜子の無邪気な笑顔。仲良い父と娘。

その様子を淋しく見ている椿。俯く。

重雄「今日も綺麗に掃除してあるな」

椿「えっ？ うん。お父さんが帰ってくる前に、綺麗にしておこうと思って。お父さんに、綺麗にしておこうと思っ。お父さん散らかってるの嫌いでしょ」

重雄、部屋を見渡し、

重雄「毎日してるのか」

椿「うん。去年、お母さんが寝込んだ時から」

重雄「そうか」

椿の頭をガシガシッと撫でる重雄の手。

椿「！」

重雄「椿は、しっかり者だな」

椿「……（重雄を見上げる）」

重雄「よし、桜子。ママに『ただいま』って言いに行こうか」

桜子「うん！」

桜子を抱き鞠子の部屋へ行く重雄。

その後姿を見送る椿。

自分の頭を、父を真似て撫でてみる。

椿「……（嬉しい）」

○深い森の中

森の小道を一人、歩いてくる椿。

遠くで桜子の歌声が聞こえる。

そばを流れる小川の河辺に目をやる。

椿「セリだ！」

駆け寄り草をかき分ける椿。

まだ芽が始めのセリを見つける。

椿「まだ少し先かな？ お浸しとか天ぷらにしたら、お母さん喜ぶだろうな」

母を思いながら、桜子の所へ向かう椿。

× × ×

ご機嫌で絵を描いている桜子。

椿「桜子」

桜子「お姉ちゃん！」

椿「お弁当、ちゃんと食べた？」

桜子「うん！」

椿「今日は何描いてたの」

スケッチブックを差出す桜子。

子供の絵とは思えないデッサンと色彩。

椿「イイなあ、桜子は得意なモノがあつて。」

お父さんに褒められて。お母さんにも沢山

甘えられて」

桜子「うん！」

椿「…：そろそろ、おウチに帰ろうか」

桜子「いや！」

椿「今日ね。ママが昼間、お店の人呼んで、

桜のお洋服買ってくれてたよ」

桜子「ホント？」

椿「うん。だから早く帰ろう」

桜子「うん。帰る！」

椿「じゃあ片付けて」

素直に椿と片付けを始める桜子。

○同・外観（夜）

椿・桜子の声「お帰りなさいーい！」

○同・居間（夜）

篠田重雄が仕事から帰ってくる。

新しい服で出迎える椿と桜子。

飛びつく桜子を抱き上げる重雄。

重雄「ただいま。桜。可愛い服だね」

桜子「うん！」

重雄「ママに買って貰ったの」

桜子「うん！」

重雄「良かったな…：（椿を見て）なんだ、

その格好は」

重雄の顔が陰しくなる。

派手で年齢に合わない大人の服を着て

化粧している椿。

椿「お帰りなさい……私もお母さんに」

重雄「お母さんにそんなモノねだったのか！」

椿「違（う）」

重雄の顔が見る見る険しくなる。

気圧され、何も言えなくなる椿。

重雄「どうせお前が又お母さんにわがママを
言っただらろう」

椿「えっ。違（う）」

重雄「そんな下品な服。化粧も。色気づいて
男に媚びでも売るつもりか？ まるで夜の
商売女だな」

椿「！」

重雄「二度とそんな格好するな。いいな！」
椿「……はい」

○同・鞠子の部屋（夜）

鞠子の鼻歌が聞こえる。

新しい桜子の服や靴、鞠子の部屋着や
化粧品等がベッドの上に並んでいる。

床に放り出されている椿の服。

明かに派手で年齢に合わない物ばかり。
鏡を見ながら口紅を取出す鞠子。

○同・鞠子の部屋（回想）

桜子「見て見て」

新しい服を着て、クルクル回って見せ
る桜子。

鞠子「嬉しい？ 桜子は何着ても可愛いわね。
アナタは」

椿「うん……」

鞠子「何。気に入らないの。せっかく買って
やったのに」

椿「ううん。ありがとう」

鞠子「（優しい声で）椿ちゃん」

椿「えっ？」

鞠子「ここにおいで。お母さんの隣」

いつもと違う母に戸惑いつつも、嬉し
くて鞠子の隣に座る。

鞠子「顔が服に合っていないから変なのよ」
口紅を取出し、椿の唇に塗る。

鞠子「ホラ。少しマシになった」

椿「ホント？」

鞠子「もつとしてあげる。ジツとしてなさい」

言われるままの椿。

アイシヤドウやチークを塗り重ねる。

鞠子「良いじゃない！ この服にピッタリよ。

お父さん帰ってきたら見せてあげなさい。

ビククリするわよ。椿が大人の女になって」

椿「うん！」

○同・鞠子の部屋（夜）

椿に塗った同じ口紅を塗ってみる鞠子。

鞠子「変？ 変、変、やっぱり変だ。アハハ」

口紅を拭き取ったティッシュと口紅を

ゴミ箱に捨てる。

○篠田家・外観（深夜）

灯りが消えている。

○同・子供部屋（深夜）

ベッドの中の椿。

声を殺して泣いている。

隣で熟睡している桜子。

床に脱ぎ捨てた椿の服。

重雄の声「色気づいて。まるで商売女だな」

椿の声「嫌われたんだ、お父さんに……もう

ダメだ」

椿「私なんて、死んじゃえбайいのに」

嗚咽が零れる。

自分で自分を抱きしめる椿。

桜子が寝返りを打ち慌てて声を押える。

そつとベッドを抜け出す。

○同・洗面所（深夜）

冷たい水で顔をジャブジャブと洗う椿。

鏡に映った自分の顔を見る。

化粧が落とし切れず、涙で目も腫れて

酷い顔がそこにある。

椿「死んじゃえбайいのに……死んじゃえ。

死んじゃえ！」

自分の頬を思い切り叩く。何度も。
また涙が込上げてくる。
水を出し、顔を思い切り洗う。

○同・廊下（深夜）

洗面所から出てくる椿。

椿「……？」

ダイニングの電気が点いている。

○同・ダイニング（深夜）

入ってきた椿。

テーブルに読みかけの桔梗の本が散乱している。

椿の声「どうして平気でいられるんだろう。
嫌われてるのに。何にもできない役立たず
なのに」

椿「大嫌い」

電気を消そうとして手が止まる。

綺麗な洋書の絵本が目に残る。

洋書の『白雪姫』。手に取り本を開く。

立派な城、美しいドレスを着た白雪姫。

椿「（魅入る）」

他の本も見てみる。

小説、童話、料理本、辞書……。

椿「山の野草？」

ページをめくる。セリが載っている。

椿「あった。春の野草。ふーん……！」

険しい顔で、あるページを凝視する椿。
階段を下りてくる足音が聞こえる。

椿「（ハッ！）」

慌てて本を元に戻す。

『白雪姫』と『山の野草』の本。

椿「……（迷う）」

手に取り、カーディガンの中に隠す。

○同・廊下（深夜）

ダイニングから出てきた椿。

廊下で桔梗と会う。

桔梗「どうしたの。椿も眠れないの？」

椿「電気つけっぱなしだった」

桔梗「ごめん。寒くなって羽織るもの取りに部屋行つたの。温かいココア淹れるけど椿も飲む？」

椿「要らない」

桔梗「椿。目が腫れてる」

椿「！（顔を逸らす）」

桔梗「もしかして、泣いてた？」

椿「泣いてません」

桔梗「泣きたい時はちゃんと泣いた方がイイ。おいで」

椿「えっ？」

桔梗「一人は悲しいよ。一緒に泣こう。ネ」

椿に両手を広げる桔梗。

戸惑う椿。

微笑んで椿を促す桔梗。

桔梗「ん？ どうした。大丈夫。おいで」

椿「泣いてない。私、泣いてないから！」

逃げる様に足早に自分の部屋へ戻る椿。

小さな後姿を心配そうに見送る桔梗。

桔梗「……」

○深い森の中

周囲の小枝を集める椿。

丸めた紙にマッチで火を点けて小枝の間に入れる。燃え上がる炎。

ランドセルから二冊の本『白雪姫』と

『山の野草』を取出す。

『白雪姫』のお城のページを破る。

『山の野草』のあるページを破る。

二枚の紙を大切にランドセルに入れる。

二冊の本を炎の中に入れる椿。

燃えていく二冊の本。

それをジッと見つめている椿。

椿「……」

○篠田家・外観

椿の声「ただいま」

○同・ダイニング

椿が入ってくる。

桜子に絵本を読み聞かせている桔梗を見てハッとする。

桔梗「おかえり、椿」

桜子「おかえり、お姉ちゃん」

椿「なにしてるの」

桜子「叔母ちゃんと本見てた」

桔梗「桜子は絵本好きね」

桜子「うん！」

桔梗「白雪姫の洋書があったと思うんだけど見つからなくて。椿、知らない？」

椿「知りません。知る訳ないでしょ」

桔梗「そうか。ごめんね」

椿「夕ご飯作るから、片付けてください」

桔梗「じゃあ向こうの部屋で見てようか」

桜子「うん！」

本を抱え出て行く桔梗と桜子。

椿「……」

○同・外観（日替わり）

玄関から椿と桜子が出てくる。

ドアを静かに閉める。唇に指を当て、

椿「シー」

桜子「しい？」

椿「ママに内緒にして後で驚かそう。だからシー。ネ」

桜子「うん！」

椿・桜子「シー」

二人、顔を見合わせ笑う。

椿「行こう」

桜子の手を繋ぎ、森へと向かう椿。

○同・鞠子の寝室

ベッドの中で雑誌をめくっている鞠子。

飽きて欠伸。

鞠子「椿！ 椿、いないのーッ？」

返事は無い。

鞠子「お腹空いたのに、何しているのかしら。

（あ。そうだ）」

ベッドから起き出し、棚をあける。

○深い森の中

手を繋ぎ、やってきた椿と桜子。

小川の草を積み桜子に見せる。

椿「コレ。見てごらん」

桜子「？」

椿「セリ。ママが好きな春の食べ物だよ」

桜子「ふーん」

椿「たくさん取って帰って、ママをビックリさせよう」

桜子「ママ、喜ぶかな？」

椿「桜子が取ったセリだよって言えば、ママ

喜んでたくさん食べて、すぐ元気になるよ」

桜子「うん！」

小川沿いの草むらを探し始める桜子。

椿も隣で一緒に探す。桜子を見る。

夢中で探す桜子の横顔。

椿「……」

○篠田家・外観（夜）

○同・両親の寝室（夜）

夕食の膳の前に、機嫌の良い鞠子。

鞠子「コレ、桜ちゃんが取ってきてくれたの。

スゴイね」

桜子「うん！」

鞠子「ママの為に？」

桜子「うん！」

鞠子「ありがとう」

桜子「うん！」

桜子、褒められ満面の笑顔。

少し後ろに座り、二人の様子を黙って

見ている椿。

鞠子「じゃあ、桜子のお浸しいただきまーす」

口に運ぶ鞠子。

鞠子「うん。美味しい！」

桜子「ホント？」

鞠子「ホント。桜ちゃんのセリ、とーっても

美味しいよ」

桜子「桜も食べる！」

椿「ダメ！」

鞠子・桜子「?!」

椿「あ……それはお母さんの分だから。桜子のはちゃんとあるから後で食べよう。ネ?」

鞠子「別に良いじゃない。ハイ、桜ちゃん」

箸で桜子の口元に運ぶ鞠子。

桜子「(迷う)」

椿「……」

桜子「いけない」

鞠子「え? いいのよ。食べなさい」

桜子「ママが元気になる方がイイ!」

鞠子「桜子……ありがとう。ママ、たくさん

食べて元気になるね」

桜子「うん!」

鞠子に抱きつく桜子。

鞠子「ウツ……」

桜子「ママ?」

胸を押える鞠子。息ができない。

椿「お母さん。どうしたの? お母さん!」

呼吸困難で苦しむ鞠子。

体が痙攣し始める。

驚き、鞠子から離れ、号泣する桜子。

椿「桜はここにいて。誰か呼んでくる!」

泣きじゃくる桜を残し部屋を出る椿。

遠くで救急車のサイレンが聞こえる。

○同・外観(未明)

皆の号泣が聞こえる。

徐々に空が明るくなり夜が明けていく。

○同・ダイニング(朝)

憔悴した重雄。

カゴに残ったセリを手にし、

重雄「これはドクゼリだ」

桔梗「ドクゼリ?」

重雄「セリによく似た毒草で、食べたら死ぬ

確率が高い猛毒だ」

椿・桜子・桔梗「!」

重雄「誰だ! こんなもの取ってきたのは」

椿「ごめんなさい!」

重雄「椿。お前が」

桜子を抱きしめ、庇う椿。

椿「お願い。桜子を責めないで！」

重雄「えっ？」

椿「きつと、何も知らずに取ってきたんだよ。

それで私が取ってきた普通のセリと一緒にしちやっただんだと思う。許してあげて」

重雄「桜子、なのか？」

椿「間違えたただよね。ね？ 桜ちゃん」

皆の視線が桜子に集中する。

驚き、大声で泣き出す桜子。

桜子をしっかりと抱きしめる椿。

重雄「……」

桔梗「……」

号泣する桜子の頭を重雄の大きな手が

ひと撫でする。

黙って出ていく重雄の後姿。

桔梗「兄さん」

幼い姉妹を気にかけてつつ、重雄の後を

追う桔梗。

号泣する桜子を強く抱きしめる椿。

椿「大丈夫だよ。お姉ちゃんを守ってあげる。

ずーっと、桜子を守ってあげるからね」

○同・庭

椿の蕾が膨らんでいる。

○ある地方都市の駅・構内

新幹線の改札を人々が行き交う。

その近くにある女子トイレ入口。

○同・女子トイレの中

洗面所で手を洗っている女性。

閉まった個室からバン！ ドン！ と

壁にぶつかる物音が聞こえる。

怪訝そうな顔で出て行く女性。

○同・個室内

狭い個室の中で、窮屈そうに着替えを
している椿（60）。

地味な服を脱ぎ捨ててビニル袋に入れる。

旅行鞆から新しい派手な服を取出して
頭から被り、袖を通す。

○同・女子トイレの中

個室から出てくる椿。

派手な服と地味な顔がチグハグな印象。
服が入ったビニル袋をゴミ箱に押込む。
鏡の前で化粧を始める。

椿「……（何かに取つかれた様に）」

○池端家・外観

立派な門構えの古い大きな民家
『池端』の表札。

○同・台所

忙しく立ち働いている椿（32）。

ガスコンロの上では同時に複数の鍋が
煮炊きの湯気を上げている。

臨月で大きく膨らんだ椿のお腹。

汗をかきながら料理している椿。

姑の池端加代（57）が入ってくる。

加代「ねえ。お昼まだなの？」

椿「すいません。朝からお腹が張って」

加代「そんなの当り前でしょ。中に赤ん坊が
入ってるんだから」

椿「生まれそうな気がするんですけど、病院
行っていいですか」

加代「こんな途中で。政信がお昼出てくるの
ずっと待ってるのよ。ご飯食べさせないで
仕事に戻すつもり？」

○同・お座敷

座敷のテーブルに座り、呑気にTVを
観て笑っている池端政信（37）。

○同・台所

椿「すいません」

加代「ちゃんと作って、後片付けもしてから
にして頂戴」

椿「……はい」

加代、出て行く。
料理を続ける椿。

鍋を持ち上げようとして激痛が襲う。

椿「うっ……」

そのまま床に倒れ蹲る。冷や汗が滲む。

椿「お願い、もう少しだけ待って……お皿に盛って、出して……片付けるまで……」

意識が遠のく。

○同・外観

元気な赤ちゃんの泣き声。

○同・台所(夕)

セミの声が煩い。

西日が差しこむ台所。

優香(0)を抱き、あやしている椿。

椿にしがみついてくる優香の小さな指。

椿の声「私がないと生きていけない弱くて小さな命」

椿「私がつと守ってあげるから。お前も

私の味方にいるのよ」

椿を見上げる優香の円らな瞳。

加代が入ってくる。

加代「何してるの！」

椿「何って、優香を」

加代「こんな暑い所で。優香がグッタリしてるじゃないの」

椿「でも」

椿から優香を奪う加代。

加代「優香は私が見るから、早く用意して」

椿「……はい」

○同・座敷(夜)

食後で寛いでいる加代と政信。

政信の膝の上でご機嫌な優香。

食事の済んだ食器を片付ける椿。

加代「優香ちゃん嬉しいねえ。お母さんより

優しいお父さんの方が好きねえ」

加代に撫でられ、笑い声をあげる優香。

終始、ただ笑顔の政信。

椿「……」

○同・廊下（夜）

食器を下げ、座敷の襖を閉める椿。

台所へ行こうとして立止る。

中から政信と加代の話し声が聞こえる。

加代の声「そろそろ篠田の家に優香を見せに行った方が良いんじゃないの？ もう首も据わったことだし」

政信の声「イイんじゃないの？ 本人が言い出さないんだから」

○同・座敷（夜）

加代「でもあちらも初孫でしょう。楽しみに待ってるでしょうに。椿さん、遠慮してるのかしら」

政信「別に待ってないんじゃない？ たまに行っても素っ気無くて、早く帰れて感じだよ。叔母さんは感じ良いけど」

加代「変な家だね。まあ、娘の嫁入り道具に使い古しの家具を持たせるような親だから、元々おかしな家だと思っただけど」

政信「母さん」

加代「お金の無い家でもないのに。親の娘に對する愛情感じないのよ。椿さんも優香に厳しいばかりで優香が可愛そうじゃない」

政信「アイツなりの躰のつもりなんだろう」

加代「だって、母親を見て脅えた顔するのよ優香。普通じゃないでしょ」

政信「まあ、ウチは俺も母さんもいるんだし」
加代「それもそうね」

○同・廊下（夜）

椿の姿は、もう無い。

○篠田家・外観

重雄の声「わざわざ来なくても良いと言っただろう」

○同・居間

椿の腕の中で泣いている優香。

桔梗（52）が笑顔で覗き込んでいる。
里帰りしてきた椿。

桔梗「そんなこと言わなくても良いでしょう。
せっかく赤ちゃん見せに来てくれたのに。
兄さんの初孫よ」

重雄「……」

椿「お父さん。優香、抱いてあげて」

重雄「（一瞥）」

桔梗「兄さん」

優香を重雄（57）に手渡す。

渋々受取り、孫を抱く重雄。

さらに大きな声で泣く優香。

椿「お父さんに似てると思うんだけど」

桔梗「そうね。目元とか兄さんに似てるかも。

可愛いわね。優香ちゃん」

重雄「……泣いてばかりだな」

椿「それは、赤ちゃんだから」

重雄「こんな五月蠅い赤ん坊、かなわん」

優香を椿に突き返す重雄。

そのまま部屋を出て行く。

桔梗「兄さん。どこに行くの」

重雄の声「仕事だ」

桔梗「多分、照れてるのよ。自分が『お祖父

ちゃん』になった事に」

椿「……」

泣き続ける優香を床に寝かせ、お茶を
飲む椿。

椿「ああ、美味しい。叔母さんって何にもで
きないけど、お茶淹れるのだけは上手よね」

桔梗「そう？ ありがとう」

椿「フツ。叔母さんって相変わらず呑気だね」

桔梗「……」

椿「嫌味とか全然分かんないものね。羨まし
い。私もそんな性格に生まれたかった」

桔梗「……（苦笑）」

椿「桜子は。全然帰って来ないの？」

桔梗「東京の生活が忙しいのよ、きつと」

椿「ただの派遣社員じゃない。帰らないのは
別の理由でしょ。帰らないんじゃない。帰

れ・ないの。お母さん、殺しちゃったから」
桔梗「椿」

椿「お父さんだって、桜子の顔なんて見たくないでしょ。あんなにお母さんのこと好きだったんだから」

桔梗「……お湯、ポットに入ってるから好きなだけ飲んでいって」

そつと席を立ち部屋を出ていく桔梗。

ゆっくりとお茶を飲んでいる椿

泣き続ける優香。

椿「……ああ。良いお天気」

居間から見える青空。

○池端家・外観

笑い声が聞こえる。

○同・庭

優香（3）と遊ぶ政信（40）。

喜びハシヤグ優香。

それを微笑ましく見ている加代（60）。

○同・台所（夜）

食器を黙々と洗っている椿（35）。

庭から楽しそうな笑い声が聞こえる。

椿「……」

流しの蛇口を全開にする椿の手。

それでも笑い声は消えない。

募る苛立ち。両手で耳を塞ぐ。

椿「……頭が痛い」

頭を押え蹲る椿。

電話の呼出し音が鳴っている。

○病院・外観

必死で駆け付ける椿。

椿「（息を切らし）」

○同・病室

ドアが開き、椿が飛び込んでくる。

椿「お父さん?!」

振り返る桔梗（55）。

ベッドの上の重雄（60）。

椿「大丈夫？ 救急車で運ばれたって」

桔梗「心臓発作で倒れて。もう落着いたから」

椿「倒れたって。どこで」

桔梗「それが……」

雪子の声「私の部屋です」

椿「？」

病室の隅にいた雪子（45）。

椿「あの……（誰）？」

雪子「すみません。本当にすみません！」

深く頭を下げる雪子。

椿「どうということ」

桔梗「（口籠る）」

気づまりで無然と顔を背けて寝る重雄。

その雰囲気です事を察する椿。

頭を下げる雪子を凝視する。

着崩れた派手なワンピース。

安っぽいストーンの付いたネイル。

重雄の声「なんだその下品な服は！」

涙と汗で乱れた濃い化粧と茶色い髪。

重雄の声「色気づいて。まるで商売女だな！」

椿に背を向けている重雄。

重雄「……」

椿「……なんだ」

フツと笑う椿。

椿の声「言ってくれば良いのに。本当は、

こういう女が好きだって。派手な服を着た

化粧の濃い女が良いって。ねえ、お父さん」

○篠田家・庭

椿の花が開く。

○とある駅・外観

オフシーズンの避暑地。

乗客の、僅かな地元の人間に混じって

大きなツバ帽子とサングラス姿の椿が

駅から出てくる。派手な化粧と服。

椿「……」

どこか雪子に似た、派手な化粧と服。

慣れていない違和感が見える。

颯爽とハイヤーを拾い、乗込む。

○高級老人施設・外観

敷地入口に『ヴィラ・アンティーク』と書かれた洒落たプレート。建物の車寄せに椿を乗せたハイヤーが着く。

降り立つ椿。建物を見上げ、

椿「……素敵」

一流ホテルのような外観。

入口に向かうとスタッフが扉を開け、

スタッフ「お帰りなさいませ」

椿「！ どうも、すいません」

恐縮し、おずおずと中へ入る椿。

○同・エントランスロビー

椿「(感嘆)」

広くきらびやかなロビー。

中央には大きな螺旋階段。

スタッフが恭しく出迎える。

持田「池端様ですね。お待ちしておりました。

どうぞこちらへ」

椿「は、はい」

周囲の入居者達が椿を見ている。

緊張しながらスタッフに従う椿。

上品な老夫婦が椿と目が合い微笑む。

ぎこちない笑顔で会釈する椿。

椿の声「私はずっと出会いたかった人達、出

会いたかった自分がここにいる」

高揚する気持ちを抑えきれない。

椿の声「やっと来れた。私の王国に」

○池端家・外観

○同・居間

テールブルいっばいに並んだご馳走。

優香(25)が永瀬昌人(30)と結婚の

挨拶にきている。

歓迎している政信(62)。

政信「本当に良かった。優香がこんな立派な

相手と結婚が決まって」

昌人「いや。まだまだ未熟で」

優香「そんなこと無い。この前だって部長が

昌人君を皆の前で凄く褒めてたんだよ」

政信「そうか。頼もしいな」

椿の声「ハイ。お義母さん、お口開けてくださいね」

政信・優香・昌人「……」

隣接する加代の寝室。襖が全開の状態。

椿（57）が寝たきりになった加代（82）に食事の介助をしている。

スプーンで一口食べさせる毎に丁寧にタオルで口元を拭ってやる椿。

政信「後にしたらどうだ。せつかく優香達が挨拶に来てくれるんだから」

椿「親に挨拶に来るのは当前でしょ。育てて貰ったんだから。それに今日は沢山料理しなくちゃいけないくて、お義母さんの食事が遅くなっちゃったから。」

政信「せめて襖閉めておけよ。母さんだって嫌だろう。そんな姿人目にさらされるのは」

椿「人目って、家族じゃない。汚くて惨めな所も見せて見せられて。ねえ、お義母さん」

加代「……（黙って目を閉じる）」

空気を換えようと話題を戻す政信。

政信「ところで式はどうするんだ」

優香「取敢えず籍だけ入れようかなって」

昌人「落ち着いたら新婚旅行兼ねて向こうで写真だけでも撮ろうかって。ね？」

昌人「うん」

椿「良いわね。今の人は気楽で」

優香・昌人「……」

椿「結婚するのに結納もお式も無いなんて、私の頃は考えられなかったわ。そういえばお嫁入りの時に父が持たせてくれた家具、あんな中古品。ってバカにされたっけ」

一人、楽し気に笑う椿。

加代「……」

政信「おい」

椿「永瀬さん？ だったかしら」

昌人「はい」

椿「こんな女のどこが良いんですか」

昌人「え？」

椿「こんな意地が悪くて陰険な女。結婚してもすぐに後悔しますよ」

困って、冗談に変える昌人。

昌人「お母さんは誰のこと言っているのかな」

優香「(椿に怒りの眼差し)」

嵐が過ぎるのを待つかの様に、椿から目を逸らし黙りこむ政信。

加代に向き直り食事の介助を続ける椿。

椿「ハイ。口開けてください。全部食べてくださいね。せつかく私が作ったんだから」

機械の様に淡々と従う加代。

○同・玄関

帰る優香と昌人を見送る政信と椿。

優香「じゃあ」

昌人「お邪魔しました」

政信「気をつけて帰えるんだぞ」

優香「うん。ありがとう」

椿「優香ちゃん」

優香「？」

椿「大丈夫よ。あなたのお祖母ちゃんの事は
お母さんがちゃんと面倒見るから。なにも
心配要らないからね」

聖母のように微笑む椿。

○田舎の駅

電車が発車する。

○電車の中

シートに並んで座っている優香と昌人。

優香「ごめんね」

昌人「なにが？」

優香「色々。嫌な気分になったよね。本当に
ごめんなさい」

昌人「……」

涙を堪える優香の頭を抱き寄せる永瀬。

昌人「大丈夫。これから二人で幸せになるん

だろう？ 俺が優香を幸せにするから」
優香「……うん」

○池端家・外観（夜）

○同・加代の部屋（夜）

寝たきりの加代の枕元に、椿が無言で
夕食の乗ったお盆を置く。

加代「……（気配に視線を動かし）」

椿「さっさと食べてくださいね。片付かない
から」

隣の座敷へ行き、政信と夕食を取る椿。

不自由な体で食事を試みる加代。

TVを見ながら笑っている政信。

TVのスイッチを消す椿。

政信「なんだよ」

椿「食事中は消してって言うてるでしょう」

政信「いいだろ。コレ、面白いんだ」

TVのスイッチを入れる政信。

旅番組。露天風呂を満喫するタレント。

椿「ねえ」

政信「分かった。コレが終わったら消すよ」

椿「そうじゃなくて」

政信「うん？」

椿「優香も片付いたし、二人で温泉でも行か

ない？ 私たち新婚旅行もしてないのよ」

政信「新婚旅行って、今更」

椿「一泊でも良いの。私、良いお宿探すから」

政信「うーん。行きたいけどさ。母さん一人

置いて出られないだろう」

椿「でも……」

政信「またその内、行けるさ」

椿「……」

椿、苦々しい思いで隣の部屋の加代を
見る。

食事を試みている加代。震える手。

器を布団の上に落してしまう。

こぼれたご飯を指で掬い口に運ぶ加代。

だが上手くいかない。

布団が汚れていく。

椿「ああ、ああ、ああ、ああ！」

加代に近づく椿。

脅えた顔で椿を見上げる加代。

椿「こんなに汚して。誰が洗濯すると思ってるの?!」

加代「……ごめんなさい」

椿「ごめんで布団は綺麗にならないんですよ」

加代「でも」

椿「でも? でもって何!」

椿がカツとし、手を振り上げる。

身を固くする加代。

思い切り加代を叩く椿。何度も何度も。

座敷の政信、何事も無いかのように、

TVを観ながら笑っている。

タレントがハシヤグ声と、加代を叩く

音だけが聞こえる部屋の中。

○葬儀場

喪服の参列者が続々と集まっている。

入口に『池端家葬儀』の看板。

○同・会場

経を上げている僧侶の声。

親戚縁者が大勢集まった会場。

参列者A「突然倒れたんだって?」

参列者B「ずっと心臓が悪かったらしいよ。」

前から『仕事はもう辞めたい』って近所の

○○さんが愚痴聞いてたって」

参列者A「なんで辞めなかったの。もう十分

働いて、悠々自適な老後で良かったのに」

参列者B「去年まで、ここのお婆さんが長く

寝たきりだったから医療費やら諸々結構な

借金があったらしい」

参列者A「借金? こんな資産家の家がねえ」

祭壇には政信の遺影。

泣き崩れている優香(28)。

それを隣で支えている昌人(33)。

喪主の席に座っている椿(60)。

背筋を伸ばし毅然と前を向いている。

その顔に何の感情も伺えない。

椿「……」

○池端家・外観（夜）

○同・座敷（夜）

仏壇の前に座り線香をあげる椿。

政信と加代の遺影が並んでいる。

椿「この家で一人になる日が、こんなに早く来るなんて」

笑みが零れる。

襖が開く音。慌てて口元を押える椿。

優香と昌人が入ってくる。

優香「チョツと良いかな」

椿「まだ寝てなかったの。疲れたでしょう。

早く休みなさい」

優香「話があるの。大事な話」

椿「明日じゃダメなの？」

優香「ダメ」

椿「なによ。怖い顔して」

優香・昌人「……」

椿「分かったわよ。少しだけなら」

昌人「じゃあ僕は部屋に戻ってるから。何か

あったら呼んで」

優香「うん。ありがとう」

部屋を出て行く昌人。

「……」黙って見合う椿と優香。

椿「なに。大事な話って」

優香「私、お父さんの遺産は全て放棄します」

椿「えっ？」

優香「その代わり……私と親子の縁、切ってください」

椿「縁を、切る？ 何をバカなこと」

優香「本気だよ」

椿「！」

優香「ずっとこの日を待ってた」

○同・子供部屋（夜）

一人、部屋で優香を待つ昌人。

昌人「ここで戦ってたんだな、たった一人で」

机の優香が子供時代の写真を手にする。

キュツと結んだ口。

固く握った両手の拳。

まっすぐ前を見て何かと戦う瞳。

昌人「……頑張れよ」

優香の声「覚えてる？ 私が子供の頃のこと」

○同・台所（夕）（回想）

椿の声「勿論よ。あの頃はお母さん、本当に大変だった。お祖母ちゃんが色々と煩い人だったから苦勞ばかりで」

セミの声が煩い。西日が差しこむ台所。

夕食の準備をしている椿（35）。

その足元で一人寂しそうに人形で遊んでいる幼い優香（3）。

椿「優香。トマト食べる？」

優香「（頷く）」

椿「ちゃんと返事をしなさい！ 食べるの、

食べないの」

優香「……食べる」

加代（60）が入ってくる。

加代「優香。こんな所にいたの。暑いでしょ。

お祖母ちゃんと涼しいお座敷行こう」

加代を見上げる優香。

笑顔で「うん！」と返事をしかけて、

そっと椿の顔を伺う。

料理の鍋から目を離さない椿。

その目は冷たく。口元は怒りを含む。

優香「……いい」

加代「どうして？ こんなに汗かいてるじゃない。向こうで一緒にスイカ食べよ？」

椿「優香。行っていいわよ」

鍋から目を離さず、事務的な声の椿。

優香「ここにいる」

加代「そう？」

優香の様子を気にしつつ出て行く加代。

淋しく一人遊びを続ける優香。

優香の目の前にトマトを差出す椿の手。

優香「！……（見上げる）」

椿「食べなさい」

椿の特別優しい笑顔。

トマトを受取り嬉しそうに食べる優香。

○同・座敷（夜）（回想）

食後、政信の膝の上でご機嫌な優香。

食事の済んだ食器を一人で片付ける椿。

加代「優香は手足が長いわね」

政信「将来は○○みたいな女優さんかな？」

優香「女優さん？なる！」

優香を可愛がる加代と政信。

2人には屈託のない笑顔を見せる優香。

それを苦々しい思いで見ている椿。

椿の声「みんな甘やかすばかりで、あのままなら優香はダメな人間になってた」

○同・座敷（夜）

椿「アナタがちゃんとした大人になれたのも、人並みに結婚できたのも、私がしっかり躡したからよ」

優香「躡？あれが？私を蹴って叩いて、

お前はダメだとか屑とか暴言吐いてたのが躡。そんなの躡じゃない。ただの暴力だよ」

椿「暴力？嘘よ。そんなことしてない」

優香「いいね。そうやって都合が悪いことは全部忘れられて」

椿「……」

優香「でも私は忘れない。アナタから言われたこと、されたこと、絶対絶対、忘れないから！」

形勢を立て直そうと冷静を務める椿。

椿「優香。お母さんがどれだけ苦労したか、

いつか分かる。あなたも子供を産めば……」

優香「私、子供は産まない」

椿「え？」

優香「一生、母親にはならない。二十歳の時

そう決めたの」

椿「どうして。昌人さんだって子供欲しいんじゃないの？」

優香「欲しいよ。昌人も私も子供好きだから。

でももし自分もアナタと同じことを子供にしちゃったらって考えたら、怖くて怖くて

……子供なんて産めないよ！」

椿「！」

優香「アナタがした事は、そういう事なの。娘の人生狂わすくらい酷い事をしたのよ」

椿「そんな……私はただ」

優香「私がダメな人間なんじゃない。アナタがダメなんでしょう。ダメな自分を誰かに押付けたくて仕方ないんですよ！」

椿「えっ」

優香「私をダメな人間にしようとしたのはアナタです！」

言葉を失う椿。

昌人が入ってくる。

昌人「優香！ 大丈夫か」

泣き崩れる優香をしっかりと抱き抱える。互いに支え合いながら自分を敵視してくる優香と昌人。

それを冷めた目でぼんやり見つめる椿。

椿の声「何が起こっているのか？ この子は、目の前の女は一体何を言ってるの？」

頭に激痛が走り、蹲る椿。

昌人「お義母さん？ どうしたんですか」

優香「大丈夫。自分の都合が悪い時は、いつもこうやって具合悪くなるんだから」

昌人「でも……」

頭を押え、床に倒れて苦しむ椿。

優香「……」

○同・椿の寝室（夜）

ベッドに寝かされた椿。

額には冷たいタオルが乗せてある。

優香「鎮痛剤、朝までは効いてるでしょう」
電気を消し、そっと部屋を出る優香と

昌人。

眠っている椿。

椿「……」

幼い優香の笑い声が聞こえる。

○篠田家・居間（椿の夢）

泣く優香（0）を渋々抱く重雄（57）。

重雄「こんな五月蠅い赤ん坊、かなわん」

優香を椿(32)に突き返す重雄。

そのまま部屋を出て行く。

桔梗「多分、照れてるのよ」

椿「ううん。違うと思う」

桔梗「違うって？」

椿「この子は、きつと出来損ないなんだよ。

だから、お父さんに嫌われたの」

桔梗「なに言ってるの。そんな訳ないでしょ」

椿「なんだ、出来損ないか……私と一緒にだ」

失望。もう娘を可愛いと思えない。

泣き続ける優香を床に放置し、お茶を

飲む椿。

桔梗「……お湯、ポットに入ってるから好き

なだけ飲んでいって」

そっと席を立ち部屋を出ていく桔梗。

優香が泣き続けるのも構わず、一人、

ゆっくりとお茶を飲んでいる椿。

椿「泣いたって仕方ないのよ。出来損ないに

生まれちゃったんだから。せめていつでも

お母さんの味方になって役に立てるように

頑張って頂戴ね」

泣き続ける優香。

椿「……ああ。良いお天気」

居間から見える青空。

○池端家・台所(夜)(椿の夢)

山のような食器を一人で黙々と洗って
いる椿(32)。

座敷から楽しそうな笑い声が聞こえる。

椿「……」

流しの蛇口を全開にする椿の手。

それでも笑い声は消えない。

募る苛立ち。両手で耳を塞ぐ。

椿「……頭が痛い」

優香の笑い声が聞こえる。

優香の小さなプラスチックの茶碗。

優香の茶碗を掴んで、思い切り流しに

叩きつける。

椿「裏切者！」

○同・椿の寝室（椿の夢）

嫌がる優香（3）の腕を掴み無理やり部屋に連れ込む椿（35）。

床に優香を押し倒す。

優香の腕を足で踏みつける椿。

椿「チョツと見た目が良いからってチャホヤされてイイ気になって」

優香の胸を蹴る。号泣する優香。

椿「中身が空っぽのダメ人間になっちゃうでしょ。いいの？ ちゃんと返事しなさい！」

泣いて声にならない優香。

椿「私が一人で苦労してる時になんてお前が楽しそうに笑ってるの。誰のおかげで可愛い服着てるの。私のおかげでしょ」

優香を蹴り続ける椿。

椿「感謝しなさい。もっともっと、私に感謝しなさいよ！」

優香の泣き声が響く。

○同・椿の寝室（朝）

ベッドで目覚めた椿。

椿「……嫌な夢。昨夜、あの子が私に変な事言うから」

椿の声「そう。全部あの子のせいよ」

○田舎の駅

電車が発車する。

○電車の中

シートに並んで座っている優香と昌人。車窓から、生まれた田舎の町の景色を見つめる優香。

優香「……」

昌人「大丈夫？」

優香「うん」

昌人「もう二度と自分の生まれた家に来られないんだよ。後悔しない？」

優香「今、終わらせない方が後悔する」

昌人「そうか」

優香の手を握る昌人。

優香もすっかり握り返す。

晴れ晴れした顔で車窓を見る優香。

優香「さようなら……今までの私」

○池端家・座敷

開封した行政書士事務所の封筒。

優香から送られてきた手紙と書類を見ている椿。

優香の声「遺産相続放棄の書類を送ります。

署名と実印を押したら郵送してください。

私も署名・実印して送り返します。それで全て終わりです。私達の親子関係も」

椿「全て終わりです……フッ」

椿の声「私をこんなに苦しめて、なんて薄情で冷たい娘だろう」

引出しからペンと実印と、複数の銀行の通帳を取出す。

銀行の残高を確認する椿。

椿「夫名義が二千万……私名義と定期預金を合せてざっと九千万？ 一人なら十分ね。

あの子が遺産放棄するなら、私名義の通帳わざわざ作らなくても良かったけど」

椿の声「結局、あの子も夫や姑と同じ人種だ。

この家の人間は、みんな私の敵」

椿「自分の身は自分で守らないと」

書類にサインし、捺印する椿。

椿の声「私は悪くない。私はこの家の被害者なんだから」

○池端家・外観

桜子の声「こんにちは」

○同・玄関

玄関ドアを開け、驚く椿。

椿「どうしたの、急に」

桜子「お線香あげさせてもらおうかと思って。

お葬式、参列できなかったから」

ニッコリ笑う桜子。

○同・座敷

仏壇に線香をあげ、手を合わせる桜子。

二人分のお茶を用意する椿。

椿「悪いわね。忙しいのに」

桜子「ううん。それより優香のこと、驚いた。

絶縁なんて。大丈夫なの？」

椿「うん。なんとかね」

桜子「もう心配で心配で。上司に無理言つて

休み貰って来たんだよ」

椿「桜子……ありがとう」

桜子「でも元氣そうで良かった」

椿「桜子が来てくれたからよ」

桜子「実はね、お姉ちゃんに良い話があるの」

椿「？」

○同・庭

椿の声「私がここに?!」

○同・座敷

老人施設のパンフレットを手にする椿。

パンフレットのページには、昔夢見た

お城の様な建物の写真が載っている。

椿「無理無理、無理よ」

桜子「どうして。素敵だよ」

椿「入会金が三千万の高級老人施設なんて。

それに食費・共益費で毎月三十万も」

桜子「お金は十分あるじゃない。遺産は全部

お姉ちゃんが一人で相続したんだから」

椿「そんな言い方」

桜子「だって事実だし」

椿「とにかく私みたいな普通の田舎の主婦が

こんなお城の様な立派な所。分不相応よ」

桜子「そう！ 本当は普通の主婦なんて入居

できる所じゃないの。でも今回は特別」

椿「特別？」

桜子「私の知り合いの遠縁の人が経営してて

普通の人は入れないの。審査があるからね。

でも今回は特別。お姉ちゃんだけ」

椿「どうして私だけ？」

桜子「実はその人……ずっと前から付合つて

る人なの」

椿「えっ？ アナタ、そんな人いたの」

桜子「一回り年下で絵の講師をしてる人」

椿「一回り年下の講師って。大丈夫なの？」

桜子「なにが？」

椿「お金貢いだりしてないでしょうね」

桜子「結婚前提のお付き合いです。それに、

彼の実家はお金持ちだし。って、彼のこと
はいいから。施設の話」

椿「でも」

桜子「評判良くて先週もTV取材が入ったら
しいよ。今は若干空きがあるけど、満室に
なるのも時間の問題だって。どうする」

椿「どうするって」

桜子「私、思ったんだけど。これは政信さん
が、お姉ちゃんに残した最後のプレゼント
じゃないかって」

椿「プレゼント？」

桜子「新しい人生始めようよ。ネ！」

椿「……あの人からの、プレゼント」

再びパンフレットに目を落とす椿。

幸せそうに微笑む老夫婦の写真。

椿「そうね……それも良いかもしれないわね」

桜子「でしょ。決まり！」

椿「ちよつと。まだ決めた訳じゃ」

桜子「良いなあ。豪華な施設で優雅な生活。

お姉ちゃんは幸せだね」

椿「そんな良いこと？ これからずっと一人
きりの淋しい生活なのに」

桜子「それなら私が一緒に住んであげようか」

椿「えっ？」

桜子「姉妹で、ずっと仲良く暮らそうよ。昔
みたいに。どう」

椿「昔、みたいに」

○深い森の中（回想）

少女の歌声が聞こえる。

椿（10）と妹の桜子（5）が手を繋ぎ、
歌を歌いながらやってくる。

無邪気に笑う、まだあどけない二人。

今より少し幸せだった頃……。

○池端家・座敷

椿「そうね。桜子とだったら。お部屋だって

2LDKだから二人で住むには十分だし」

桜子「なに言ってるの。部屋は別だよ」

椿「別？ どうして」

桜子「施設には彼と二人で住むから。言った
でしょう、彼とは結婚前提だって。だから
お姉ちゃんとは別々の部屋で建物は一緒」

椿「そんな」

桜子「大丈夫。毎日会えるよ。食事も外出も、
いつも一緒。寝る部屋が別なだけ」

椿「……まあ良いわ。桜子がそれで幸せなら」

桜子「じゃあ、私達の分の契約と支払いも、
一緒においてね」

椿「待って。どうしてそうなの?!」

桜子「だって入居条件、60歳からだもの。私
たちはまだ無理じゃない」

椿「だからって、一人で二部屋分なんて契約
できないでしょう」

桜子「それは彼がなんとかするから」

椿「あのね、桜子。決して安くない値段なの。

二世帯分なんて払えないわよ」

桜子「じゃあ頭金だけでいいよ」

椿「そんな。簡単に言わないで」

桜子「大丈夫。私たちの分は、後で必ず彼が
払ってくれるから。ネ。お願い！」

椿「……」

○バス停

バスを待っている桜子。

スマホを取り出し早川宛にメッセージ。

スマホ画面『OK！ 私たちの部屋も

一緒に契約してくれそう。帰ったら、

お祝いにワイン開けようか』

早川からすぐに返信が届く。

『了解！ 俺、ステーキ焼くよ』

桜子「ワインと良いお肉買ってかなきゃ」

ご機嫌でバスに乗り込む桜子。

○池端家・外観（深夜）

○同・寝室（深夜）

椿が押入れの奥を探している。

椿「あつた！」

古い小さな箱を取出し、蓋を開ける。
中には子供の頃の玩具やドンダリ等。

椿「懐かしい」

紙の切れ端を取出し広げる。

昔、桔梗の絵本から破り取ったページ。

華やかなお城。綺麗なドレスの白雪姫。

愛おしそうに撫でる椿の指。

椿「まさかこんな形で夢が叶うなんて」

桜子の声「ずっと前から付き合ってる人が

いるの。一回り年下で絵の講師をしてる人。

結婚前提のお付き合い」

椿「……桜子に、そんな相手がいたなんて」

切れ端を箱に入れ、押入れに仕舞う。

ベッドに入るが、なかなか眠れない。

椿の声「母を殺してしまった罪悪感を抱えて、

ずっと一人で苦しんでいると思ってたのに。

結婚前提の恋人なんて。何年も前から」

椿「凶々しい女！ ……（ハッ！）」

思わず口から出た言葉に自分で驚く椿。

寝返りを打ち、瞼を強く閉じる。

椿「色々あり過ぎて、疲れてるんだわ」

椿の声「だって桜子は可愛い妹。私がずっと

可愛がって面倒見て、お母さんの代りに。

あれ？ どうして私、お母さんの代りして

たの？ 思い出せない。また頭が痛い……」

古い箱を仕舞った押入れ。

○篠田家・両親の寝室（椿の夢）

ベッドの中で雑誌を読んでいる鞠子。

遠足のプリントを差出す椿。

鞠子「遠足？ そんなの行かなくて良いわよ」

椿「でも……」

鞠子「でも？」

椿「クラスの皆、行くのに」

鞠子「皆なんて関係ない。ウチはダメ」
椿「どうして」

鞠子「お母さん、具合悪いのよ？ どうして
お母さんを放って、自分だけ楽しい思いし
ようなんて考えられるの？ 酷い娘ね！」

椿「……ごめんなさい」

鞠子「こんな物、サッサと捨てて」

プリントを丸めて椿に投げる鞠子。

椿に当たって、床に転がるプリント。

椿「……」

○深い森の中（椿の夢）

丸めたプリントに火を点け、小枝の山
に入れる椿。炎が上がる。

『白雪姫』のお城のページを破る。

『山の野草』のあるページを破る。

『ドクゼリ（猛毒）』の文字と、写真が
載ったページ。

炎の中で燃えていく二冊の本。

それをジッと見つめている椿。

椿「……」

○深い森の中（椿の夢）

幼い桜子と椿がセリを摘んでいる。

桜子の様子を伺う椿。

夢中で摘んでいる桜子。

セリに紛れてドクゼリが生えている。

椿「……」

手を伸ばし、それを摘む椿。

気づかれぬ様、カゴの中に混ぜる。

椿「桜子の取ったセリでママ、元気になるよ」

桜子「うん！」

ニッコリ微笑む椿。

○池端家・寝室（朝）

鳥のさえずりが聞こえる。

ベットの上で頭を抱えている椿。

青ざめた顔。唇が恐怖で震えている。

椿「……嘘よ……」

椿の声「また嫌な夢を見ただけ。きっとそう」

気を取直し、勢いよく起上る椿。

○同・座敷

引越しの準備をしている椿。

段ボール箱に荷物を詰めていく。

椿「これはもう着ないわね。これも、これも」

着古した普段着をビニル袋に入れる。

残った服を段ボールに入れるが、数が

少なく半分も埋まっていない。

仏壇から政信と加代の遺影を取出す。

写真の中、笑顔の政信。

椿の声「いつもこの笑顔だった……初めて

会った時も、私がお義母さんに虐められて

泣いた時も、私がお義母さんを叩いた時も。

ずっとこの笑顔」

椿「まるで、笑顔の能面を張付けたみたい」

政信と加代の遺影をビニル袋に入れる。

椿の声「ここは私の王国じゃなかった」

○地方の繁華街

平日の昼間で閑散としている。

地方密着型のデパートが見える。

○同・デパート・洋服売場

服を物色する椿。

地味な服に手を伸ばしかけてやめる。

椿「これは今までの私。これからは……」

派手な服を掴む椿の手。

○篠田家・庭

真っ赤に咲いた椿の花。

枝からポトリと地面に落ちる。

○高級老人施設・外観

○同・椿の部屋・リビング

入口の扉が開き、椿が入ってくる。

椿「……素敵！」

小奇麗な家具が配置されたリビング。

部屋の隅には椿の引越しの段ボールが

積んである。

一つ一つの調度品に触れてみる椿。

ソファに気取って座る。体が沈む。

椿「わっ！ フカフカ」

ソファで跳ねて、はしゃぐ椿。

○同・同・寝室

シングルベッドのある寝室。

椿「チョッと狭いけど寝るだけの部屋だしね」

自分を納得させ、ドアを閉める。

○同・同・キッチン

システムキッチンと大型冷蔵庫がある。

空の冷蔵庫を開ける。

椿「これなら沢山入りそう。お肉も、お魚も、

スイカも大きな丸ごとでも大丈夫だわ」

備付けのオーブンを開ける。

椿「これでチキンの丸焼きを作ったら、桜子

喜ぶかしら」

楽しい空想を広げる椿。

椿の声「でも、もう誰かの為に料理なんてし

ない。自分がしたい時に作りたい料理だけ

作る。ううん。作って貰えばいいじゃない。

私の好きな物を食べたい時に！」

○同・同・リビング

紅茶を飲みながらソファで寛ぐ椿。

椿の声「そうよ。ずっと人の為に尽くしてき

たんだから。人生の貯金したのと同じよ

ね？ ならもう我慢するのは私じゃない。

今度は他の人の番」

椿「人生の貯金、全部使わなきゃ」

○同・ダイニング（夜）

夕食時。椿が入ってくる。

入口で立止り、目を見張る。

ホテルのレストランの様な豪華さ。

上品な入居者達が食事している。

椿「……（緊張）」

スタッフ「池端様。こんばんは」

椿「どうして私の名前」

スタッフ「勿論、存じております。なにか、

お手伝いできる事はございますか？」

椿「あの。初めてで、どうしていいか」

スタッフ「では、お席にご案内します」

スタッフの後ろをオドオドついて行く。

食事中の入居者達の視線を感じる。

笑われているように感じる。

気後れする椿。

スタッフ「こちらでいかがですか？」

窓際。一番端の薄暗いカウンター席。

椿「はい」

スタッフ「メニューは、こちらをご覧ください」

椿「あ、ありがとうございます」

卓上のメニューを示し立去るスタッフ。

改めて周囲を見る。

皆、綺麗な服を着て化粧し、装飾品も

身に着けている。

自分の姿を見る。

崩れた化粧。田舎で着ていた外出着。

椿の声「もつとちゃんとした服を買っておけ

ば良かった。お化粧も。最初が肝心なのに」

メニューを見る。セットが3つ。

一万円。五千元。千五百円。

椿「一番安くて千五百円！ その上が五千元

……（高い）これが毎日」

思わず声に出し、慌てて口を押える。

椿の声「落ち着いて。お金はある。今日から

私は、この人達と同じ世界の住人になった

んだから」

「すみません」とスタッフを呼ぶ。

椿「この一番上の（一万円）お願いします」

スタッフ「かしこまりました」

椿「生まれ変わるために」

背筋を伸ばし毅然と前を向く椿。

○同・外観

電話の呼出し音。

○同・椿の部屋・リビング

段ボール箱を開け荷物を片付けながら、
携帯電話で電話をかけている椿。
相手は出ない。

椿「まだ寝てるのかしら？」

呼出し音が留守番電話に変わる。

椿「もしもし。桜子？ 私だけど、こっちに
いつ来れるの。待ってるから連絡ください。
じゃあ……ね（切る）」

携帯電話を置き溜息をつく椿。

荷物の整理を続ける。

出した服をクローゼットのハンガーに
かけ、下にヒールやパンプスを並べる。
派手な服が並んだクローゼットを見て
満足そうな椿。

椿「これで準備はできた」

○同・ラウンジ

入居者達が、テーブルで優雅にお茶を
飲みながら、談笑している。

精一杯着飾ってラウンジに現れた椿。

一瞬視線を感じるが、また其々の会話
へと戻る入居者達。

空いた席を見つけて座る椿。

近くのスタッフに、

椿「すいません。紅茶を」

× × ×

紅茶を飲み、少し落ち着いた椿。

佐竹「こんにちは。新しく入居された方かし
ら？」

声をかけられ、振り返る椿。

佐竹光子（65）と向井幸子（64）が、
にこやかに立っている。

椿「そうです。昨日着いたばかりで」

佐竹「もしかして、お一人？」

椿「ええ。夫は先日亡くなって」

佐竹「まあ。大変でしたね。お辛かったで
しょう」

椿「……そうですね」

佐竹「私たちも夫を亡くして、ここに一人で
住んでるんですよ」

向井「お仲間ですね。仲良くしてくださいね」
椿「こ、こちらこそ。よろしくお願いします」

深々と頭を下げる椿。

× × ×

窓際のテーブル席で談笑している椿と
佐竹と向井の三人。

佐竹「随分、ご苦労なさったのね」

向井「私ならとても耐えられない。池端さん、
ご立派だわ」

椿「そんな。自分にできることを精一杯して
きただけです」

同情され、嬉しい椿。

佐竹「池端さんは紅茶がお好きなの？」

椿「ええ。珈琲よりはお茶の方が」

向井「ストレート？ それともミルクかしら」

椿「私はミルクテイが」

向井「アッサムとウバはどちらがお好み？」

椿「えっ？」

佐竹「嫌だ。平凡過ぎるわよ。ミルクテイに

こだわる方はアールグレイやラプサンスー
ションにもミルクを入れるらしいわよ」

向井「私、ラプサンスーション苦手。香りが
個性的過ぎて。池端さんもそう思わない？」

椿「……え、ええ。そうですね」

返事に困り、紅茶を飲んで誤魔化す椿。

佐竹「池端さんの口紅、素敵なお色ね。どち
らでお求めになられたの？」

椿「これは……田舎のデパートで……」

佐竹「私、見たことも頂いたこともないわ」

向井「珍しいお色よね。池端さんのお顔立ち
が華やかだから、お似合いになるのね」

椿「そんな。私なんて」

佐竹「本当。よく似合っていらっしゃるわ」

向井「自分に似合うモノを知っている女性は
素敵よね」

椿「……ありがとうございます」

二人から賛辞され、嬉しい椿。

○同・ダイニング（夜）

夕食時で満席のダイニング。

中央のテーブルで食事している佐竹と向井と椿。

佐竹「昨夜、カウンターの一番端の席に案内されたでしょう」

椿「ええ」

佐竹「ダメよ。舐められちゃ」

椿「えっ？」

向井「そうそう。私たち、少ないお金を払ってここで生活してるんだから。正当な対応をしてもらわないと」

椿「正当な対応」

佐竹「良いサービスと良い環境を要求して当然ってこと」

向井「不当な扱いを受けたらハッキリ抗議したらイイのよ」

椿「そうですね……私達、お客ですものね」
頷き同意する佐竹と向井。

○同・椿の部屋・リビング（夜）

戻ってきた椿、ソファに寝転ぶ。

椿「夢みたい。こんな世界があったなんて」

クローゼットに並んだ服と靴。

椿の声「明日は何を着よう。何を話そう」

椿「桜子も早く来れば良いのに」

携帯電話で桜子に電話をかける椿。

呼出し音が続く。

イライラする椿。

呼出し音が留守番電話に変わる。

椿「もしもし。桜子？ 私だけど、どうして電話くれないの」

○桜子のマンション・部屋

ペティキュアを塗っている桜子。

電話を取らず留守番電話を聞いている。

椿の声「こっちはすごく楽しいわよ。素敵な

お友達もできたし」

桜子「……それは喜ばしい」

椿の声「桜子も早く来なさい。絶対楽しいから。これ聞いたら連絡してね。じゃあね」

桜子「ハイハイ。こっちも楽しくやってます

から、ご心配なく、つと。どう？」
塗り終わった足爪をソファでスマホを
見ている早川（40）に見せる桜子。

○高級老人施設・ラウンジ

濃い化粧をした椿がやってくる。

椿「こんにちは。良いお天気ですね」

周囲の入居者達に声をかける椿。

曖昧な笑顔で、そそくさと離れていく
人たち。

椿「なによ。感じ悪い」

椿の声「いいわ。私には佐竹さんと向井さん
がいるもの。私の優しく上品なお友だち」

テーブルに着き、スタッフを呼ぶ。

椿「紅茶。ミルクはちゃんと温めてね。この
前は常温のままだったから」

スタッフ「……すいません」

椿「二度と同じミスしなければ良いのよ」

無然と立去るスタッフ。

椿「何、あの態度。ここのスタッフ、程度が
低いのかしら？」

椿の声「佐竹さんたちが言った通りハッキリ
言ってやらないと分からないんだ。こつち
がちゃんと躰してあげないと」

椿「これだからダメ人間は」

佐竹と向井が現れ、椿に笑顔を向ける。

二人に笑顔で手を振る椿。

椿の声「この人達だけが、私の味方……」

○同・椿の部屋・リビング

桜子に電話をかけている椿。

呼出し音から留守番電話に変わる。

切って、再びかけ直す。

呼出し音が続く。

椿「どうして出ないのよ」

不安と苛立ちが募る。

呼出し音から留守番電話に変わる。

椿「いい加減にしてよ！」

切って、再びかけ直す。

今度は、呼出し音は鳴らずに切れる。

椿「えっ？」

再びかけ直す。

やはり呼出し音は鳴らずに切れる。

椿「どうして……？」

椿の声「私……嫌われたの？」

○桜子のマンション・桜子の部屋の中

キャンバスの前に座っている桜子。

桜子「……いい加減にしてよ！ 相変わらず

鈍いんだから」

椿のメモリーを着信拒否に設定する。

○銀行・外観

○同・ATMコーナー

通帳を機械に入れる椿。

椿「限度額は50万……取敢えずはこれで」

画面で50万円を押す。

取出し口に出た札束を掴み、数えずに

財布に入れる。

険しい顔で銀行を出て行く。

○デパート・外観

都内の一流老舗デパート。

○同・化粧品売り場

海外ブランドのカウンター。

口紅を選んでいる椿。

椿「これは佐竹さんに似合いそう。こっちは

向井さん……これはスタッフの……」

次々と口紅を手にとっていく椿。

椿の声「分からない」

○同・婦人売場

レースのハンカチが並んでいる。

端から一枚ずつ全部手に取っていく椿。

椿の声「分からない」

○同・食料品売り場

洋菓子のショーケースを覗く椿。

椿「綺麗……」

色とりどりのマカロンが並んでいる。

椿「一個五百円?! こんな小さなお菓子が」

椿の声「でも」

椿「(店員に) コレ全種類包んでください」

椿の声「私には分からない。コレが高いのか
高くないのか。何を基準にしたら良いのか」

○同・外観

デパートから持ちきれないほどの袋を
両手に持った椿が出てくる。

椿の声「相手に、どのくらい尽くしたら許されるのか。私を受け入れてもらえるのか。
見捨てずにいてもらえるのか……誰に訊いたら本当のことを教えてもらえるのか」

○高級老人施設・外観

椿の声「何が正しいかなんて、私に教えてくれる人は誰もいなかったから」

佐竹の声「これを下さるの? まあ」

○同・ラウンジ

ラウンジで寛いでいる椿と佐竹と向井。
口紅とハンカチを渡す椿。

椿「昨日たまたま入ったデパートで見つけて。
佐竹さんにお似合いかなと思って。これは
向井さんに」

向井「あら。私にも? いいのかしら」

椿「勿論ですよ。私達、お友だちですもの」

佐竹「お友だち」

含みのある視線を交す佐竹と向井。

椿「今日の夕食は何時にいらっしゃるの?」

佐竹「今日は……ねえ」

向井「ええ。そうよね」

椿「何かあるんですか?」

佐竹「そうなの。ごめんなさいね」

向井「先程突然決まっつて。お許してくださいね」

椿「そんな、許すなんて」

佐竹「良かったわ。池端さんが聡明な方で」

向井「本当ね。じゃあ、私達はそろそろ」

佐竹「そうね。では、ごきげんよう」

席を立つ佐竹と向井。

口紅とハンカチがテーブルの上に残されたまま。

椿「アッ。忘れて（ます）」

互いに耳打ちし、クスクス笑いながら歩いていく二人。

その後姿を見つめる椿。

手には行き先を無くした口紅。

椿「……」

○同・外観（夜）

ガラス越しに灯りの点いたダイニングが見える。夕食時で賑わっている。

○同・椿の部屋・リビング（夜）

テーブルの上はデパートで買い集めた化粧品や小物や菓子等プレゼントの山。床に座り込み、その山を見ている椿。

椿「……田舎のデパートの安物じゃないのに。

銀座の一流デパートの高い高い品物なのに。みんな、バカよね」

その一つを手に取り、包みを乱暴に開ける。総レースのハンカチ。

広げて透かし見る椿。

椿「綺麗」

レースの隙間に爪を入れ……破く。

呆気なく糸が切れ、解れていく。

椿の指で引き裂かれていくレース。

それを見て笑いが出る椿。

椿「これじゃ手も拭けない。田舎のスーパーで買った特売の方がずっとマシじゃない」

面白がって、次々と包みを破く。

佐竹に渡そうとした深紅の口紅。

重雄の声「厚化粧の上品な女だな」

鏡を覗き、自分の唇に塗る。

椿「私の方が似合いそう。あ、そうか。私が

綺麗だから嫉妬したんだあの人。私に嫉妬。

いつも気取ってる嫌なオバサンが私に嫉妬。

なんだ。アハハ」

腹を抱えて笑う椿、空腹で腹が鳴る。

菓子の箱に手を伸ばす。

包みを破き箱を開ける。

カラフルなマカロンが並んでいる。

一つ摘み、

椿「こんな小さいくせに五百円。生意気」

重雄の声「贅沢なんて生意気だ」

口に入れる。

二つ、三つとマカロンを口に頬張る。

椿「砂糖の塊みたい。全然美味しくない」

箱ごと、ゴミ箱に投げ入れる。

重雄の声「女が物を投げるんじゃない！」

レースのハンカチで口を拭う。口紅で

汚れたそれもゴミ箱に放るが入らない。

拾おうと、座ったまま手を伸ばす椿。

椿「届かない……もう少し……」

届かずそのまま床に倒れる。

重雄の声「女が床に寝そべったりするな！」

力尽きたように動かない椿。

椿「私、欲しかった物みんな手に入れたんだ

……こんなに簡単だった。アハハ」

笑う椿の頬に涙が落ちる。

あと少し、レースに届かない椿の指先。

椿の声「お金で人の心を買おうとした代償は

思った以上に高くついた」

○同・会議室

椿がスタッフに相談している。

スタッフ「そう言われましても規則ですから」

椿「でも実際、妹は一度もこの施設に来てい

ませんし、当然、食事も光熱費も使ってい

ません。なのに毎月三十万引かれるのは、

おかしいでしょ」

スタッフ「契約しただけでお部屋を利用され

ていない方は他にもいらっしゃいますよ。

ここに入居される方は経済的に余裕のある

方々ばかりで、こんなご相談は初めてです」

椿「(屈辱)」

スタッフ「どうでしょう。妹さんのお部屋は

解約されては如何ですか？ 入会金は戻り

ませんが毎月の支払いは無くなりますし」
椿「解約？ それはできません！」
スタッフ「こう言っただけは失礼ですが、現状で
経済的に厳しい様でしたら、入居されても
早い段階で退去という事になるかと」
椿「……」
スタッフ「妹さんと、ご相談なさった方が」
椿「……分かりました」

○東京

行き交う山手線の電車。

○桜子のマンション・外観

線路沿いの古い賃貸マンション。

桜子の声「解約？ 嫌よ！」

○同・桜子の部屋

桜子の部屋に來ている椿。

部屋の隅には描きかけのキャンパスと
絵具が散らばっている。

桜子「突然押しかけて来たかと思つたら、何」
椿「電話に出ないからよ。あなたを心配して
言ってるんでしょう。一緒に住めなくなる
かもしれないのよ？」

桜子「だから一緒に住めるように、お願い」

椿「だったら月々の支払いは自分でしなさい」

桜子「そんなのお姉ちゃんが何とかしてよ。」

頼りにしてるから。ネ！」

椿「桜子。あなただって働いているんだし、
もう十分過ぎるくらい大人でしょ。自分の
事は自分で何とかしなさい」

桜子「そんな」

椿「あと、あなた達の入会金も返してね」

桜子「今は無理よ」

椿「どうして。彼がすぐ払うからって言っ
たじゃない。だから立て替えたのよ」

桜子「彼、仕事が凄く忙しくて、今そんな話
できない」

椿「大丈夫なの？」

桜子「大丈夫って」

桜子の描きかけの絵を眺める椿。

椿「その人、桜子の為にならない気がする」

桜子「なにそれ。会ったこともないくせに」

椿「だって、40過ぎてカルチャーセンターの予備講師なんて。しかも一回り以上年下で」

桜子「関係ないでしょ」

椿「こういう言い方はなんだけど、桜ちゃん、遊ばれてるんじゃない？」

桜子「はあ？」

椿「真面目に言ってるの。あなたの為に」

桜子「私の為」

椿「そうよ。私は、私たちはいつもお互いの味方だったでしょ？」

桜子「味方か。都合のいい言葉だね」

椿「私はいつだって何にもできないあなたを助けて守ってきてあげたでしょ！」

桜子「出た。私が入してやった。私のおかげで。本当、恩着せがましいよね」

椿「桜子」

桜子「でも本当は逆だよね。『お姉ちゃんが』私に恩があるんだよね」

椿「何のこと」

桜子「自分の罪、私に擦り付けたじゃない」

椿「罪……って」

桜子「ド・ク・ゼ・リ……だっけ？ 森の」

椿「?!」

桜子「まさか、私が気付いてないって本気で思ってたの。バカね。アハハハ」

椿「……」

○深い森の中(回想)

幼い桜子と椿がセリを摘んでいる。

桜子の様子を伺う椿。

夢中で摘んでいる桜子。

セリに紛れてドクゼリが生えている。

椿「……」

手を伸ばし、それを摘む椿。

気づかれぬ様、カゴの中に混ぜる。

椿「桜子の取ったセリで、お母さん、きつと元気になるよ」

桜子「うん！」

ニツコリ微笑む椿。

桜子の声「私のこと子供だと思って甘く見てたんだよね」

またセリを摘み始める二人。

桜子、摘んだセリをカゴに入れようと
して手が止まる。

桜子「？」

セリの中に僅かに違う形のドクゼリ。

桜子の声「お姉ちゃんは絵が下手だから分らないだろうけど、私には普通のセリとは全然違って見えたよ」

○篠田家・ダイニング（回想）

憔悴した重雄。

カゴに残ったセリを手にし、

重雄「誰だ！こんなもの取ってきたのは」

桜子「お（姉ちゃんが）」

椿「ごめんなさい！」

桜子を抱きしめ、庇う椿。

椿「お願い。桜子を責めないで！」

桜子「?!」

椿「きつと、何も知らずに取ってきたんだよ。

それで私が取ってきた普通のセリと一緒にしちやっただんだと思う。許してあげて」

桜子の声「最初は何を言ってるのか分からなかった。いつも親の前で『優しい姉』ぶつてたから、あの夜もそうかと。でも……」

重雄「桜子、なのか？」

椿「間違えただけだよ。ね？桜ちゃん」

皆の視線が桜子に集中する。

桜子の声「そんな子供の他愛のない『媚び』なんかじゃなかった。大きな暗い波に飲み込まれる様で、怖くて怖くて」

驚き、大声で泣き出す桜子。

桜子をしっかりと抱きしめる椿。

桜子の声「助けて！私じゃない。犯人は、お姉ちゃんよ！って叫びたかったのに」

号泣する桜子を強く抱きしめる椿。

桜子の口を自分の胸元で塞ぐ。

椿「大丈夫だよ。お姉ちゃんが守ってあげる。

ずーっと、桜子を守ってあげるからね」

桜子「……」

桜子の声「見張ってる。ずっと私を見張ってるから、誰にも言うな」

○桜子の部屋

桜子「あの時、本当は私にそう言いたかったんでしょ。怖い人」

椿「……記憶違いよ。子供の頃の事だもの」

桜子「まだ誤魔化せると思ってるの？ もうとつくにバレてるのに」

椿「お父さんだって、あなたが犯人だと信じてたし、死ぬまで恨んでたわ。だから実家に帰れなかったんでしょ？」

桜子「気づいてたよ、お父さん」

椿「えっ？」

桜子「例え私が間違ってドクゼリを摘んだとしても『しっかり者のお姉ちゃん』がそれに気づかずに料理の入る訳がないって」

椿「……お父さんが」

桜子「だから東京に出て来てからは実家には帰ってくるなって、お父さんに言われたの。

また悪事に利用されるかもしれないから」

椿「嘘よ。お父さんは桜子のこと何も言わなかった。名前も出さなかった。一度も」

桜子「でも東京にはよく来てたよ。月に一度くらい。一緒に食事に行ったり服やバッグ買って貰ったり楽しかったな。親子デート」

椿「嘘」

桜子「嘘じゃないよ。ホラ見て。お父さんに買って貰ったバッグ。このワンピースも」

クローゼットからバッグや服を出し、

自慢する桜子。

それを見て笑いだす椿。

椿「やっぱり嘘じゃない。お父さん、贅沢は大嫌いだったもの。外食も、そんな派手な服も『下品だ』って毛嫌いしてた。知らなかったのね」

桜子「知らないのは、お姉ちゃんの方だよ。」

本当のお父さんのことも自分のことも全然分かってない」

椿「本当の私って、なによ」

桜子「悪魔。お父さんも言ってた。あの子は本物の悪魔だ。怖い女だって」

椿「そんなことは言うハズ無い」

桜子「言わないよ、本人になんて。言ったら今度は自分が何されるか分からないもの」

急激な頭痛に頭を押さえる椿。

椿「……もういい。黙って」

桜子「桔梗さんくらいよね、お姉ちゃんのことと本当は良い子だ。心が淋しいだけだって庇ってたの。あの人、浮世離れしてるから」

椿「黙って」

桜子「聞きたくなかった？ 私も話すつもりなかったよ。あなたが今まで通りずーっと

『優しいお姉ちゃん役』やっててくれたら」

椿「……役」

椿の声「そんな役、望んだんじゃない。私はただ……」

桜子「そうだ。施設に入居したら、ご挨拶代わりに、皆さんに私達の子供の頃の話してあげようか。きつと盛上るよ」

椿「お願い、やめて！ 頭が痛い。黙って！」
床に蹲る椿。

それを冷ややかに見下ろす桜子。

桜子「変わらないね。都合が悪くなると具合悪いアピール。そういうとこママそっくり」

椿の声「私が……お母さんに？」

○篠田家・鞠子の寝室（回想）

鞠子「食欲無いの。もう下げて」

ベッドで背を向けふて寝する鞠子。

肩を落とし食事を持って出て行く椿。

ドアが締まった音で振り返る鞠子。

鞠子「……」

ベッドから起き出して棚を開ける。

中から好物の菓子を出し、幸せそうに頬張る。

桜子の声「どこも悪くないのに病人ぶって、

家事は全部お姉ちゃん任せ。なのに被害者のつもりでいるんだから、笑っちゃうよね」

○桜子のマンション・部屋

桜子の話を聞き、茫然とする椿。

椿「……お母さん、病気じゃなかった」

桜子「あれは、強いて言えばわがまま病？

私はペット代りに溺愛されてたから楽だったけど。お姉ちゃんもは災難よね」

椿「お父さんも桜子も知っていて、誰も私を助けてくれなかったの？」

桜子「助けないよ。下手に助けたらその嫌な役が自分に回ってくるかもしれないもの」

椿「……嫌な役……」

自虐的な笑いが零れる椿。

桜子「とにかく、お金のことはお姉ちゃんが何とかして。私は淋しいアナタと『一緒に住んであげる』んだから」

椿「桜子。でももう無理なの。本当にお金が無いのよ」

桜子「知らないわよそんなの。それはそつちの問題でしょう」

椿「そんな」

桜子「自分の事は自分で。さっき、自分でもそう言ったじゃない。オ・ネ・エ・チャン」
椿「……」

○高級老人施設・椿の部屋・リビング

東京から戻った椿。

荷物はそのまま。

服も脱ぎ捨てたまま。

ソファに倒れ込んでいる椿。

椿の声「頭が割れそうに痛い。強い薬を飲んで眠りたいけれど、夢を見るのが怖い。今、

悪夢を見たら自分が壊れてしまいそうで」

桜子の声「私に罪を擦り付けたクセに」

椿の声「あれは夢の中の事だったハズ」

重い体をゆっくり起こす椿。

クローゼットから小さな箱を取り出す。

椿「……」

意を決し、蓋を開ける。
中を探る椿の手。

白雪姫の絵本の切れ端、玩具……底に
もう一枚の切れ端。

椿「……」

手を伸ばし、紙を広げる。

椿「(ハッ!)」

ドクゼリの写真と解説が載ったページ。
慌てて中身を戻し、箱の蓋を閉める。

椿「嘘よ。私はそんな人間じゃない」

箱をクローゼットの奥に仕舞い、扉を
閉める。

椿「でも……」

椿の声「もう戻れない」

○高級老人施設・ダイニング(夜)

入居者が優雅に食事している。

○同・売店(夜)

棚の菓子パンを一つ手に取る椿。

○同・廊下(夜)

売店の袋を下げた椿が歩いてくる。

椿「あっ」

前方から佐竹と向井が歩いてくる。

椿とすれ違う。二人、椿を見ずに、

佐竹「お金が無い方は出て行けば良いのに」

向井「本当。姿が見えるだけで、こちらまで

暗い気分になりそう」

椿など存在しないかのように会話し、

ダイニングへと入っていく。

椿「……」

一人、部屋へ向かう椿の淋しい背中。

○高級老人施設・椿の部屋・リビング(朝)

椿の声「人と会わなくなつて、この頃時間が
分からなくなつた」

散らかった部屋の中。

物が散乱したテーブルや床。

ゴミ箱も溢れている。

その中で、菓子パンをボソボソと食べている椿。
椿「……」

○同・同・キッチン（朝）

コンロの上の鍋がグツグツと煮立っている。

椿の声「時間も、曜日も、親しかったはずの人の名前も……」

○桜子のマンション・外観（夜）

○同・桜子の部屋（夜）

キャンバスに向かって絵を描いている桜子。

ソファに寝転び酒を飲みながらスマホを見ている早川。

桜子「今回の絵、自信あるんだ。見て。この配色と構図、なかなかじゃない？」

早川「うん……そうだね」

桜子「ねえ。いつになったら私の絵、画廊に飾ってもらえるのかな」

早川「うん……どうかな」

桜子「私のこと、オーナーに話してくれてるんだよね？」

早川「うん……そう思うよ」

生返事でスマホから目を離さない早川。

桜子「ねえ。聞いている？ 聞いてないよね」

早川の電話が鳴る。

早川「親父？（電話にでて）もしもし……えっ。何それ。俺たち知らないよ……うん」

桜子「？」

早川「桜子さん。大変」

桜子「実家で何かあったの？」

早川「いや。桜子さんのお姉さんが」

桜子「えっ？」

○高級老人施設・外観

早川の声「桜子さん、施設からの電話出なかったでしょ？ それで親戚が親父通して俺

に連絡してきたみたいで」

○同・会議室

スタッフと相談している桜子と早川。
桜子「それで宜しくお願いします」
頭を下げる。

○同・外観

出てきた桜子と早川。

早川「お姉さんに会って行かなくていいの？」

桜子「いい。私のこと分らないかもしれないし。妹として、やるべき事はやったから」

早川「うん」

桜子「良かった。入居できる施設見つかった。

資産も成年後見人に管理してもらう手続き
できたし。私、偉いよね？」

早川「うん。偉い偉い」

桜子「昔から、あの人には迷惑かけられてば
っかり！ 少し仕返ししようと思って私達
の部屋も契約させたのに結局解約だし」

早川「うん」

桜子「本人は呆けて、もう自分がしたことは
全部忘れてるのかな」

早川「うーん」

桜子「何にも分からない子どもの私に自分の
罪擦り付けた事も、全部忘れちゃったのか
と思うと……やっぱり悔しい。悔しいよ」

早川「……」

桜子の震える肩を優しく抱く早川。

二人、並んで駅に向かっていく。

○老人施設・外観

地方都市にある古い施設。
『憩いの家』の看板。

○同・椿の個室

狭いワンルーム。

ぼんやり窓の外を見ている椿。

椿「……」

介護士の佐藤由香（28）が入ってくる。

佐藤「池端さん。散歩に行きますよ」

椿「散歩？ 嫌よ。行きたくないわ」

佐藤「歩かないと、益々ボケちゃういますよ」
椿「私、ボケてません！」

佐藤「ハイハイ。だったら一人で着替えてください。いつまでもパジャマでいいで」

椿「アナタは優しくない人ね。私は頑張つて優しくしてたのに」

佐藤「頑張つて？ 誰に」

椿「……誰だったかしら」

佐藤、クローゼットから施設の支給の些末な服を出す。

佐藤「着替えますよ。こっち向いてください」
椿「……」

大人しく従い、着替える椿。

○憩いの家・外観（雨）

○同・椿の個室（雨）

佐藤が入ってくる。

佐藤「雨やみませんね。仕方ないから散歩はやめて部屋で軽い運動でもしましょうか」

椿「本がいい。本を読んで」

佐藤「えっ。私、本は苦手で」

ベッドサイドの引出しから折り畳んだ紙を出し、佐藤に広げて見せる。

佐藤「英語？ 私、英語なんて読めないし」

椿「白雪姫は最後、綺麗なドレスを着て素敵なお城で暮らすの」

佐藤「白雪姫か……この話、嫌いだったな」
椿「？」

佐藤「この隅で焼いた鉄の靴を履いて踊ってる女。今は継母になってるけど本当は実の母親なんだって。なんか、分かるなって」
椿「……」

佐藤「私ね、この母親もしかしたら白雪姫のもう一つの将来の姿じゃないかって思うんです。たまたま王子様に出会って愛されたから幸せになれただけで。運が良いなって」
椿「たまたま……幸せ」

佐藤「そうだ。今度、良い人紹介しますよ。」

白雪姫読んでくれる人」

椿「ホント？ 嬉しい！」

○同・食堂（朝）

入居者全員で食事している。

その中に椿もいる。

佐藤が来て、

佐藤「今夜、約束した『本を読んでくれる人』

池端さんのお部屋に来ますから」

椿「白雪姫」

佐藤「本を読むのがとっても上手な人だから

楽しみにしてください」

立去る佐藤。

子どもの様に食事ももりもり食べる椿。

○同・椿の個室（夜）

そわそわしながら待っている椿。

ドアをノックする音。

椿「！」

ドアが開き、本を抱えた老女が静かに

入ってくる。桔梗（80）だ。

桔梗「こんばんは。椿」

椿「私を知ってるの？」

桔梗「勿論。椿は私に分かる？」

椿「……？」

桔梗「そう」

悲しい顔で椿を見つめる桔梗。

桔梗「椿はあれから本が好きになったの？」

椿「好き？ ……分からない。本を読むのは

生意気だから」

桔梗「でも本を読んで欲しいのね？」

椿「コレ」

破った絵本のページを広げる。

桔梗「……これ、ずっと持ってたの」

椿「いつか綺麗なドレスを着て素敵なお城に

住むの。それが私の夢」

桔梗「！」

思わず涙ぐむ桔梗。

椿「じゃあ、読みましょうか」

椿の隣に腰かけ、絵本を開く椿。

その本を覗き込む椿。

× × ×
絵本を音読している桔梗。

桔梗「……そして熱い靴を履かされた継母は、いつまでも踊り続けました」

椿「この継母は本当のママなんでしょう？」

桔梗「え？」

椿「白雪姫は大人になったら、この継母になるんでしょう」

桔梗「どうしてそう思うの？」

椿「いつもこの部屋にくる女の人が言ってた。白雪姫が幸せになれたのは王子様に出会ったから。運が良かったからって」

桔梗「それはどうかな」
椿「？」

桔梗「私はこう思う。白雪姫が幸せになれたのは素直だったから。小人の親切を素直に受取って、小人の言葉を素直に聞いて努力したから。だから王子様に出会えたって」

椿「……努力？」

桔梗「そう。努力」

椿「努力なら私もしたわ。毎日毎日毎日」
桔梗「椿？」

椿「嫌なこと我慢して甘えたくても我慢して怒られない様に嫌われない様に頑張って、頑張って、頑張って、頑張って！」

桔梗「椿」

椿「……叔母さん？ 桔梗叔母さん」

桔梗「（頷く）」

ベッドから立上り部屋を見渡す椿。

椿「私、どうしてここにいるの。こんな狭い部屋で、こんな……惨めな部屋」

桔梗「椿。ここがあなたのお城よ」

椿「えっ？」

桔梗「あなたがずっと行きたかった場所」

椿「違う！ 私はお城に行きたいの。幸せになりたいの」

桔梗「幸せよ。今、あなたは幸せなの」

椿「幸せ……私が？」

桔梗「この部屋には、あなたに面倒なことを
押し付けたり、自分の荷物を背負わせるよう
なズルイ人はいない」

椿「……」

桔梗「あなたに『ダメ人間』なんて下らない
名前をつけて優越感に浸る愚かな人もいな
い。あなたを傷つける人の為に我慢なんて、
もうしなくていいの」

椿「……ここが……私の、お城」

自分を抱いて咽び泣く椿。

桔梗「椿。おいで」

震える肩を必死に自分で抱く椿。

桔梗が両手を広げている。

桔梗「一人で泣くのは悲しいよ。私も一緒に
泣くから」

椿「……（顔を上げ）一緒に？」

桔梗「椿と一緒に。おいで」

微笑んで椿を促す桔梗。

椿の足が、少しずつ桔梗に歩み寄る。

桔梗の手が椿の体を捕え抱きしめる。

その温かさに驚く椿。

椿の声「温かい……抱きしめられるのって、
こんなに温かくて柔らかかったんだ」

桔梗の腕の中で顔を閉じる椿。

桔梗「ごめんね。あの時、こうやって抱きし
めてあげれば良かった」

○篠田家・廊下（夜）（回想）

桔梗「泣きたい時はちゃんと泣いた方がイイ。
おいで」

椿（10）に両手を広げる桔梗（30）。

戸惑う椿。素直に甘えられない椿。

桔梗「ん？ どうした。大丈夫。おいで」

椿「泣いてない。私、泣いてないから！」

逃げる様に足早に自分の部屋へ戻る椿。
その小さな後姿。

○憩いの家・椿の個室（夜）

桔梗に抱きしめられている椿。

桔梗「これからは好きなだけ甘えていいよ」

椿「甘える。私が」

桔梗「何も考えず、素直に甘えればいいの。

他にしたいことはある？」

椿「したいこと……楽しいこと」

桔梗「楽しいこと。良いわね」

椿「でも、何が楽しいのか分からない」

桔梗「じゃあ、これからゆつくり探そう。椿

の本当の人生は今日から始まるんだから」

椿「私の……本当の人生。今から？」

桔梗「人は最後の日まで、新しい自分を生き

直すことができるんだから。大丈夫」

椿「……（頷く）」

椿の声「どこかにある、おとぎの王国を探すのは終わりにして。今の場所で、新しい私
で……」

○篠田家・庭

庭の椿の木。

枝に新しい小さな芽が芽生えている。

椿の声「本当の、私の王国を作ろう」

E N D

参考資料

- ドクゼリ [Wikipedia](#)